血と涙
マゼッパ

汗血千里マゼッパ

バイロン原作

木村鷹太郎譯

バイロン原作
木村鷹太郎譯

汗血千里マゼッパ

序

マゼッパ堅忍不拔、勇氣凛たり、戀愛艶たり。勇氣戀愛兩々映して美は益々美に勇は益々勇なり。彼れ戀愛より曠野に—汗血千里—遂に曠野を變じて王坐となす。マゼッパの如きは眞の男子と謂ふべきなり。

明治四十年二月二十二日

東京淀橋柏木にて　譯者識

汗血千里

マゼッパ

緒言—『マゼッパ』に就いて

目次

一　運命瑞典王を離れ去り
二　振り出だしたる骰子の偶然のみ
三　ウクライナ族の酋長たり
四　『言葉はたとひ少きも』
　　『我の二十の春なりき』
五　『さてもテレサの姿』
六　『一度は或は否むとも』

七　『我は愛しぬ愛されぬ』
八　『伯爵殿は烈火の如き激怒なり』
九　『「馬連れ來れ」—馬連れ來さる』
十　『驅けれり驅けれり』
十一　『風の翼に打乘りて』
十二　『若木も、老樹も、狼も』
十三　『地は陷落し天は回轉し』
十四　『波は打寄せ、星燦爛と』
十五　『鬣には水滴り』
十六　『今や野蠻の精力は』

十七　『死したるものゝ其上に』
　　『我の最後の日の光』
十八　『待ち設けたる烏は飛び』
十九　『見てコサックの乙女は微笑み』
二十　『荒野を變じて王座となさしむ』

緒言

『マゼッパ』に就いて

木村鷹太郎

北歐の彗星王カロルス十二世と共に、史上に著名なるマゼッパは、バイロンの詩に由つて又た一層に著名の人物となり其堅忍不拔なることは、艶麗美と勇壯美とを以つて人心に映ずるに至れり。

イワン・マゼッパ（Ivan Mazzeppa）一千六百四十四年に生

まるコサックの酋長なり。家貧なりと雖ポドリア(Podolia)侯領なるマゼッピンツイ(Mazepintzui)の名族の後裔なり。ポーランド王ヨハン・カシミールの宮廷に、小姓の教育を受けしが、一貴族の夫人に通じたるより、夫人の夫大ひに怒り、マゼッパを裸體となし、ウクライナ(Ukraina)より獲來れる馵馬に縛し、烈しく之れを鞭打ちて放ちしかば、馬は己の産地を指して驀然として馳せ歸へり、マゼッパ其の地のコサックの農夫に助けられ、此處に客となり居りしが、遂に其才幹に由つて一千六百八十七年推されて其地の酋長となれり。彼れ

ピョートル大帝の信任を受け、ウクライナ候の稱號を與へられしが、ウクライナをしてロシアより獨立せしめんと欲し、始めにポーランド王スタニスラウスと共に陰謀を企て、後スエーデン王カロルス十二世のロシアを征伐するに當り、マゼッパ之れと謀を通じたるが、ピョートル早くも其の企圖を察知し、マゼッパの國都バッーリンを屠りたり。マゼッパ遁れ來りてカロルス王の軍に會し、ポルタワの戰爭に大敗してカロルス王と共にトルコに遁れ、後、一千七百〇九年ベンデル(トルコ)にて毒を仰で死せり。

○

バイロン此詩の例言に、ボルテールの著なる『カロルス十二世傳』中、マゼッパに關せる部分を引用せり、左の如し（されども此に余の引用せる部分は、バイロンの引用せるものより聊か多し。括孤内の文は引用せる部分なり）

『勝略者たるカロルス王は猶ほ、モスコヰットの首府に至る大道を取れり。而してスモレンスコよりモスクワに至る道程尚ほ一百「リーグ」、軍漸く糧糗に乏し。ピヘー伯は懇切に請て曰く、願くば將軍レーヱンハウプ

トの、軍須を齎らし、一萬五千の援兵を率ゐ來るを待ちて、共に發せんと。王は他人の諫言を用ゆること甚だ稀なりしかば、此萬全の良策に從はず、忽ちモスクワ街道を轉じて、南の方ウクライナに向つて行進を始めしかば全軍の驚愕言ふべからず。抑もウクライナはコサック人の鄕にして小韃靼、ポーランド、及びモスコヰットの中間にあり。……常に自由を企望したりと雖、モスコヰット、トルコ、ポーランドに圍繞さるゝを以つて、此三國の一を、其保護國と頼み、隨つて又た其主君と仰がざるを得ざりしを以つて、始めはポーラン

ド人の保護に賴りしが、ポーランド人の之れを臣僕視すること甚しかりしより、其後ロシア人に歸服たしり。されどもロシア人も亦同一專制の權威を以つて之れを制馭したり。此國人は、元來總督の名を以つて一侯を撰立するの特權を有したりしと雖、ロシア人の爲めに此の特權を奪はれ、モスクワの朝廷之を指名するに至れり。

『當時此任に當れる人はポドリア侯領に生れたるマゼッパと呼べる波蘭の紳士なりき。此人ヨハン・カシミールに仕へて小姓の敎育を受け、宮中の優麗なる生活の

臭味に薰染せり。年壯にして一紳士の夫人と穴隙を鑽りしかば、事發覺して、夫人の夫、櫟を以つて之れを撻たしめ、彼れを裸體となし、野馬に縛して之れを放つ。此馬ウクライナ（ロシアの南部の地）より牽き來りし者なるより、自ら其故土に歸へり疲勞飢餓交々迫りて、半死半生のマゼッパを乘せ來れり。農民數人見て之れを助け、其後永く此地に住し、數々韃靼人との戰爭に功名を顯はし、其の智識超絶せるより、コサック人の尊敬を博し、名聲漸く增加せしかば、魯帝（ピョートル大帝）遂に之れをウクライナ侯となさゞる可からざ

ることゝなれり。

『マゼッパ一日、モスクワにて魯帝に陪食したることあり、帝囑するに、コサック人を訓練し、並に之れを順從仰頼せしむるの業を以つてす。マゼッパ乃ち答へて曰はく、ウクライナの位置と其の人民の性質とは、此くの如き計畫を妨げて爲すこと能はざらしむるなりと。魯帝酒氣漸く上りしかば、平時と雖喜怒を制する能はざる性なれば、マゼッパを謀反人なりと呼び、械縛せんと脅かせり。

『マゼッパ、ウクライナに歸りて反逆の企をなしゝが、

スエーデン軍の境邊に現はるゝに遇ひ、之れが實行に扶を得たり。其意謂へらく、己れ獨立の君となり、ウクライナと、ロシア帝國が滅ぼしたる他の小國とを合して、強大なる王國を建立せんと。此人や勇敢にして機略あり、且つ太だ剛毅なり。之れを以つて竊かにスエーデン王と相結び、魯帝の滅亡を促し、以つて自意を行はんと謀れり。』

然るにピョートル早くも其企圖を知り、マゼッパの國都バツーリンを攻めて之を屠りたり。『マゼッパの親友は其劍を奪はれ、車輪に摧裂せらるゝ者三十人に至り、

其市府は灰土に歸し其貨物は掠奪せられ、スエーデン王の爲めに準備中なりし糧糧は取押へられしかば、こゝに六十人を率ゐて金銀を荷載せる馬匹を以つて其身を遁れ」辛ふして、國境に現はれたるカロルス王の軍に合し、一萬五千の兵を以つて、ロシア軍五萬に對し、猛烈慘激、悲壯なるポルタワ戰爭を戰ひ、全然敗北し、兵士の大部分は、或は死し、或は生擒せられ、カロルス王は負傷し、僅少なる殘兵を以つて遁走す。

「カロルスは敵に追躡せられ、其馬を斃されたり。大佐ギエタと云へる者あり、身傷き出血の爲めに疲れたりと雖、己の馬を王に献じたりしかば、諸人王を扶け起し、再び馬上に登せたり。……將軍レーエンハウプトは此敗軍を率ゐて一道よりし、王は騎兵の若干を具して他道より進みたり。行進中、王の車破壞せしかば諸人再び王を馬に乘らしめたり。其不幸の極、王は遂に終夜一森林中に彷徨したり。茲に於て、其勇氣も疲れはてたる精神を維持する能はず、其創傷は疲勞の爲めに愈々激して、堪ゆべからず、其馬亦疲れて斃れしかば、遂に一樹の根に横臥すること數時間、魯軍は四方に王を捜索して瞬々逼近せんとするの危險に迫れり」

（右に引用したるは故立花銑三郎君の譯に係る『北光』中の文にして、二三余の變更したる個所あり）

（此詩は此際マゼッパが、カロルス王に物語りするの仕組みなり。）

是よりスエーデン王カロルスは、大速力を以つて遁走し、僅々數百の殘兵及びマゼッパ附隨し、ヲルスクラ（Volskla）河とポリステネース河との會合するペレヲロフナ（Pelewolochna）と稱する所より、非常の困難を以つてポリステネースの大河を渡り、其れより廣漠たる土地を經過し、殆と饑餓に瀕し、辛うじてボッグ（Bug）

河を渡り、遂にトルコの「パシャ」（副王）の厚意に由りドニエステル（Dniester）河上のベンデル（Bender）に駐まり、スエーデン王カロルス、マゼッパ及び殘兵數百はトルコ政府の客分となれり。然るにカロルス王トルコに客たる三年間は、其待遇上種々不當の要求を爲し、或はトルコをしてロシアと戰はしむる陰謀を企つるなどして、大にトルコ政府の迷惑を感ぜしめたるが、遂に私かに遁れてスエーデンに歸へりて、又々不運の數度の戰爭を爲し、ノルエーを征伐する時彈丸に中つて沒す。

元來ボルタワ戰爭はマゼッパの献策に由つて戰はれたるものにして、マゼッパの名はロシア全國の敎會より破門呪咀する所となれり。

後ロシアのピョートル大帝は、トルコ政府に要求するに、マゼッパの引渡を以つてせしと雖マゼッパは病を獲て（或は毒を仰ぎしとも云ふ）死し、（一千七百〇九年）爲めに其運命を遁れたり。マゼッパの墓はルーマニアの有名なる都府ガラッツ（Galatz）の聖マリア寺にありと謂ふ。

此詩は一千八百十八年、バイロン・ラヱンナにて書き

しものにして、其草稿は、バイロンの情婦ギッチョリ伯爵夫人テレサ手寫して英國に送りて印刷に附せしなり。『マゼッパ』中、美麗なるポーランドのテレサ、其年若き情郎及び年老たる夫「パラチン」伯を描くに當つてや、必ずや、イタリアなる情婦テレサ、其夫ギッチョリ伯及び自己の身の上を織り込みしや疑ふべきに非ざるなり。（ギッチョリ伯爵夫人テレサの事は拙著『バイロン文界の大魔王』八十三頁以下を見よ。）

汗血千里 マゼッパ

バイロン作
木村鷹太郎譯

一

時は維れ、慘激なるポルタワ戰爭の後、
運命瑞典王を離れ去り、
今や既に鬪ふ能はず、又た血を濺ぐ能はざる、殺戮さ
れし軍隊を
累々として王の四周に殘したり。

戰爭の權力も光榮も
空しく戰爭に奉仕ふなる、人等と同じく眞實なく、
今や勝に打誇れる、「ツァール」に全く歸しはてゝ、
他年一層今にもまさり、暗黑凄愴なる時と—
又た一層に、紀念すべき其年が、
今に優れる軍勢と、尙ほ傲慢の其名とを、
殺戮侮辱に附するまで、
モスクワの都の城壁は、再び心安けくなりにけり。
實にこれ大なる破滅にして、又た甚しき蹉跌なり。
其一人に與へたる激動は—萬人に取つての電擊なり。

二

こは之れ、振り出だしたる骰子の偶然のみ。
負傷なしたるカロルスは、晝夜兼行、
己が血潮と臣下の血潮にまみれつゝ、
野を過ぎ河を打渡り、遁げざることを得ざるなり。
此敗走を助けんと、數千の兵士は斃れたり。
今や「眞理」は聊かだにも、「權力」を恐るゝ要なき所の、
弱りはてたる此場にも、
一と言だにも大望を、非難する聲起るなし。

王の馬は斃れたり。(註)ギエタは、我騎る馬を王に讓り—
其身はロシアの捕虜となりて死してけり。
此馬とても又假令、心盡くしていたわりしも、
激しき疲れに弱りはて、數里を行きて斃れたり。
取り圍みたる敵軍の、目標となれる篝火を
影ほの暗く遙かに見つゝ、
森の深みに、王は其身を、遂に休めて叶はずなりぬ。
嗚呼これ彼等國民が、必死の力を出だしつゝ、
求めし所の、名譽の月桂冠なるか、はた又た休みの場
所なるか。

彼等は疲れ弱りはて、苦しみなやむ其王を
荒き樹蔭に横へぬ。
王の手負はいとも烈しく、王の五體は甚だ硬く、
疾ましき今の此時は、げにも陰欝暗憺として、
創の熱持つその血潮は、
時に取つての救なる、暫時の眠も之れを許さず。
苦しみ此くの如しといへども、王は終始王者の如く
我が沒落の威儀を保ち、
惱みの極のこの時にも
彼れの烈しき苦痛をば、彼れの意志の臣下となし、

嘗ては諸國の人民が、彼れの四周に服せし如く、
凡ての苦痛は肅然してと、皆盡く服從せり。

三

將士の一團—嗚呼如何に少きかな。
僅か一ト日の其中に、此くも人數減りにけり。
さは云へ今の此敗軍—皆誠心を盡しつゝ、
又た勇敢に戰ひぬ。
無念の悲しみ言葉なく、
王も軍馬も人々も、共に地上に坐しにける。
げにや危難は、獸も人も、皆な一樣になしはてゝ、
其必要の同じきより、凡てのものは友にぞある。

人々の内、ウクライナ族の酋長たり、
沈着剛膽、而も若く非ざるマゼパは—
其身の粗らき其如く、年古り荒らき樫の樹の、陰を己
の枕と定め、
長途の軍に疲れしも、
此コサックの酋長は、先つ其馬を撫て下し、
馬の爲めにと、木の葉の床を作りなし、
膝をさすり、髭を撫て
腹帶を緩るめ、手綱を解き、
此くして後に如何に善く、馬の秣に饜けるかを、

見るを始めて樂しみぬ。
こは此時に至るまで、疲れし彼れの此愛馬は、
夜露に打たれ休むをば、
嫌ふ恐れのありしなり。
然りと雖此馬は、其主の如く堅忍不拔、
食事も床も何ぞ望まん、
その氣は強きも亦柔和に、
爲すべき事は何事も、必ず喜びゝ之れを爲さん。
毛荒く、捷く、足強く
全く凡て韃靼流に、馬は其身を振舞へり。

彼れの聲をば聽きわけて、其呼ぶ時は來るなり。
數千の人は入り交るも、
星も有らざる夜は來るも、
凡ての人の其中にも、彼れは其主を識り別けて、
夕より曉に至るまで
馬は子鹿の其如く、彼れの主人に附きまつへり。

四

マゼッパ此くて外套廣ろげ、
樫の根幹に槍を立てかけ、
行程長き其間に、武器は何れも完きかを、
一々あらため試めしつゝ—
火藥は火皿に尙ほあるか、
燧の石は擊鐵に、しかと保たれ有るなるか、
刀の柄は如何ならん、又た其鞘は如何ならん。
帶革若しや摩り切れずや、撫でさすりつゝ改めぬ。

次いてけだかき此老將は、
糧嚢及び鑵の中より、
いと僅かなる蓄へを、取り出だしつゝ並べつゝ、
宮に仕ふる人々等が、酒宴の席に在るよりも
尙ほ沈着の態度もて、
其食物の、全部或は其一部を、
王に捧げ、左右の者に薦めたり。
カロルス王は打ゑみつゝ、
暫が間、僅かの彼れの馳走に加はり、
強ひて機嫌を壯んにし、

負傷と不幸を超脱して、感ぜぬ樣を力めつゝ、
扨て言ひけらく『吾等味方の一同は、
何れも心は勇敢に、手腕も強き其中に、
戰鬪にも、進軍にも、又た襲擊にも、
言葉はたとひ少きも、其爲す所の優りて多きは、
嗚呼マゼッパ、汝に及ぶ者なけん。
アレキサンドロス以來今日まで、
汝がブケファロスと汝程、
格好したる配偶は、地上に曾て生れざり。
洪水をも、原野をも、其を乘り廻はすの巧みなる、

スキチア人も其名譽を、凡て汝に讓るべし。』
マゼッパ答へて言ひけらく、
『さば、我が馬に乘る術の、學びの校を語らんか。』
カロルス王言ひけらく『如何に爲してか老酋長
此くも汝は此術に、深く熟達致したる。』
マゼッパ曰く『此事語らばいと長し。
急流激するポリステネースの彼方にて、
我等の馬の休息して、秣飼ひ得る其れまでに、
吾等の一は、少くとも、敵の十に當りつゝ、
數々打擊を加へつゝ、

數里を尙ほも、吾等は行くを要するなり。
されど陛下よ、陛下の御身は休みを要す。
吾は陛下の、此軍隊の哨兵たらん。』
瑞典王言ひけらく『されども我れは望むなり、
汝の話を語り聽かせよ、
或は我れは夫れに由り、
眠の賚得ることあらん—
其は今や、一時まどろむ其希望も、
我れの目よりは飛び去り居ればぞ。』

『さらば陛下よ、其如きの心もて、
吾れの記憶の、七十年の昔をたどらん。
思ひ出づれば、我れの二十の春なりき—
然り、カシミール—ヨハン・カシミールの、王たりし時
のこと—
我が青年時代の六年の間、
我れは王の小姓なりき。
此王眞に學を好み、
全く陛下と異にして、
一度も戰を起こすことなく、

再び失ふ其爲めに、新の版圖を獲もなさず
たゞワルシャワの議會にて、議論するある其外は、
見苦しきまで、最も平和に支配せり。
さは言へ王を惱ましする、心懸りのものは有り。
王は「ミューズ」と女性を愛せり。
されど是等は、時に王に從順ならず、
王をして、自ら不和を願はしむることもあり。
されども直に、怒り解くるや、
王は他なる女を愛し、或は新の書を讀みつ、
次には盛大非常の祭を行ひ—

琦羅を飾れる王の宮廷、

みやび盡しゝ、貴婦人將士を見ん爲めに、

全ワルシャワの人々は、王の門邊に集りつどひぬ。

王は波蘭のソロモンなりと、

彼れの詩人等皆歌へど、

こゝに一人、恩給得ざる詩人ありて、諷刺の詩を詠み

阿諛諂佞を爲さゞるを、獨り自ら誇り居たり。

實にこれ、戯れ試合、狂言道化の宮廷にて、

此宮中にある者は、一人だにも詩文作らぬ者はなく

吾が如きだも一度は歌を作りつゝ、

吾れ其短歌に記名しぬ、『望あらざるチルジス』と。

時に一人の「バラチン」(九)の宮内官あり。

伯爵にして名門の後裔なり。

又た其富や鹽(十)礦銀山の豐けき如く、

其尊大の趣や、

或は之れ、天より降りし者かと思はる。

彼れ此く血統に富み、礦物に富み、

王座の下に在る者にて、匹敵する者殆どあるなし。

彼れつくゞと、己が貨財を打眺め、

又其系圖を見つめつゝ、

遂には思想の亂れを起こし、
頭腦有らざる者かの如く、
祖先の立てし功蹟は、己れのものと思ふに至りぬ。
されども彼れの妻なる人は、
夫と意見を異にせり。
妻は芳紀、夫よりも三十若かく、
夫の支配の下に在るを、日々に物憂く思ひ來て、
遂には種々の願い事、或は希望、或は恐れの思を起こ
し、
德義に向つて、いと僅かなる、別れの涙をこぼしつゝ。

穩かならざる夢一二三、ワルシャワの若人達に向くる目
使
歌の會及び舞踏の會など、
待ちに待たるゝ、さは云へ常の機會にて、
是等の樂しき折々は、
冷淡極まる貴婦人をも、いとも優しき人となし、
天に昇らん旅行券よと、人噂せる稱號もて、
夫の君たる、伯爵の名を飾るなり。
されど是等の稱號に、最も當れる人々を、
彼等の敢て誇らぬは、いとも不思儀の事なりけり。

五

『其時吾は、容姿美しき青年なりき。

此七十の吾が年にて、此くは言ふとも可ならんか—

吾が青春の其當時、

少年たれ成人たれ、

小姓たれ、或は騎士の階級たれ、

吾れに對して、華美を競ひ得る者は、其數いとも少なかり。

吾れは力も強く、年若かく、又た其氣質は快活に、

我が容貌は、君等が今見るが如きに非ず、

肌理もこまかにありしかど、今はむさく荒れはてぬ。

こは之れ齡と心使ひと、戰とが、

我れの額の表より、我れの心に、皺鋤き入れしに由れば

なり。

此くて人若し、吾れの今と昔とを、比較するを得たりとも、

尙ほ我が同族にも一類にも、

吾れの言葉は信ぜられじ。

抑も此變化の始まりは、

我が年長けて、小姓たるの容貌を、失ふよりも長き前
なり。
たとひ年には寄りたりとも、
我が體力も勇氣も心も、其衰ろへざるは皆な人々の知
れる所。
若し夫れ然らざらんには、今や星なき空を天蓋とし、
我れは木蔭に、
昔を語り居らざるべし。
さても―テレサの姿―
今も彼處の胡桃の木と、我れとの間に、

立ち現はるゝ思ひして、
其想ひ出は、此く鮮かに溫かし。
されど此く吾が愛する女の姿、
如何なる言葉に言ひ表はさん―
其眼は實に亞細亞的、
我れに隣れる土耳其人種と、
我が波蘭の血統との、混合したるものにして、
今此空の、暗きが如き黒眼勝ち―
されどまた、夜半に月の出そめの如き、
なつかしき光は影さしつ―

太く、暗く、光の流れに浮びつゝ、
其身自身の光彩に、溶け去るかとも思はれて、
凡て之れ愛、半は疲勞半は火、
恰も火刑に逢ふ聖者等が
死を喜べる樣にして、
恍惚として、天を仰ぐに似たりけり。
其額は夏の湖水、
波もさゞめくなきの時、
日光さし込み、透きとほり、
天も己れの面影を、其處に眺むる如きなり。

頰と唇—我れ如何なれば、此くは語り進むぞも。
そは我れ其時女を愛し、今尙ほ愛する故にこそ。
此くて我れの性として、
善にも惡にも其愛や、實に烈しき極端なり。
されど吾等は今と雖、狂するばかりに尙ほ愛し、
此現在の年齡までも、
過去の空しき影に取りつかれ、
さもマゼッパが最後まで、王に從ふ如きなり。

六

『吾等は逢ひぬ—相見つめぬ—吾れ見て、と息つきにけり。

彼女、言葉なけれど答は爲せり。

千萬無量の音調も、徵證も是れに含まれて、

吾等其を聽き又た見るも、誰しも之を解くことなく—

知らず識らずの思想の火花は、

不思議と共に意味深き

一種異樣の通信を、

疲れし胸より工夫し出だし、

燃ゆるが如き鎖を連ね、

意志あるに非ずして、若き人等の胸と心を結びつゝ、

如何になしては知らざれど、

電氣の線の爲す如く、燒きも盡くさんばかりなる、烈

火を傳へ送るなり。

我れ、彼女を見てと息つき—心の内には泣き居たり。

されども我れは女に知られ、

疑念を胸に置くことなく、語り得るに至るまでは、

尙ほも本意なき隔り保ちぬ。

二人の關係は、此くまで熟せしとは云へども、
我れ尙ほ胸に焦れ居て、漸く思ひを明かさんと、心決
しぬ。
さはいへ、震へる弱き我が聲は
殆ど一と時其間、唇よりぞ消え去りぬ。
或日の事よ、或慰みの勝負あり、
げにこれ、たわけし遊びにて、
一と日を之れに費やしぬ。
吾れ今ま其名を忘れしが
或不思議なる機會にて、

吾等仲間に入れられしが、其機會の何なりしかは忘れ
たり。
或は勝つとも負くるとも、何れなりとも厭ふなし。
たゞ此く深く戀ひ慕ふ、人の近くに我が居りて、
又た見ることを得だにせば、
滿足なりと思ひたり。
我れ番兵のその如く、彼女をのみ見守りぬ。
（闇き今宵の、吾等の見張りも此くこそあれ。）
見れば彼女、物思ひある面色にて
其爲す所に氣のなき如く、

負くるも勝つも悲しまず、又た喜ばぬ様なりき。
彼女勝つべしとしも見えざれど、
自ら己が心もて、其身を此處に縛りし如く、
尙ほ時長く遊びけり。
こゝに於てか我が頭腦に、忽然一の思想は浮び出ぬ、
さも之れ、電光の、閃きしにも比べく、
彼女の身の振には、
我れを失望に、宣告せざる、或ものありと思はせたり。
此考へに從ひて、我は言葉を洩らしゝが、
凡てこれ、前後揃はぬものなりき。

其雄辯は、何等の値あるなきも、
彼女は其を聽きたり——之れにて足れり——
一と度び耳を借す者は、再び我に聽くものぞ。
彼女の心情は、確かに、氷にては非ざるなり。
一度は或は否むとも、其實拒むに非ざるなり。

七

『我は愛しぬ　愛されぬ。

聞けば陛下は

かゝる優さしき、情の事は知り玉はぬと。

若し夫れ眞に然りせば、吾が歡樂と苦痛との、話は凡て省略せん。

陛下に在つては此くの如きは、笑ふべきこと、空しきことゝ見ゆるならんも、

凡ての人は盡く、支配せん爲め生れ來らず——

或は己が情欲を、

或は陛下の爲す如く、是等の情欲、及び多くの國民を。

我は一個の君主なり——然り寧ろ君主なりき。

能く數千の頭として、

彼等を率ゐ、激戰奮鬪せしめ得れども、

たゞ我れ自身を制御するは、

之れと同じき事を得ず。

さるにても、我れは愛しぬ、愛されぬ。

げに〳〵我れは幸運なりき。

されど至極の幸福は、苦痛に終るものなりけり。

吾等忍びて相逢ひぬ。

夫人の室に、吾れの忍ひし「其時」は、

烈火の如き待つ戀の、養老資産「と今ぞ知る」

たゞ「かの時」の其外は、我が夜も晝も凡て何ぞや——

青年より老年まで、長き年月其間、

是れに似たる何事をも、思ひ出ださんことはなし。

吾れはウクライナの地を返還し、

再び小姓の身となりて、

一人のやさしき胸の君となり、己が劍の主となりて、

たゞ青春と健康との、天の授けの其外に、

寶石もなく富もなき、樂しき小姓とならまほし。

吾等忍びて相逢ひぬ——

人言ひけらく、忍び相逢ふ樂しみは、二倍の樂しみあ

るものよと、

そは我れ知らず——

天地の間に公明正大、　たゞ彼女の生命をば、我がもの

なりと言ひ得ん爲め、

我れの生命を、與へんことぞ願はしき。

我は屢々はかなみつ、且つ又た長く恨みたり——

たゞ〳〵秘密に　忍び相逢ふのみなるを。

八

『凡て戀人等に對しては、多くの人目あるものにて、此くの如き多くの人目は、實に吾等の上にもありき。かゝる折には、惡魔も禮儀を守るべし――あゝ惡魔――我れは彼れを、害することを好まざり。たゞ其敬虔なる義忿をば、洩らさんとの其爲めに、餘りに長く、心休めぬ其人は、稍强情の、聖者にてもや之れ有らん。然りと雖、美しき或夜のこと、待ち伏せしたる間者等

は
不意に現はれ、驚く吾等二人を捕へぬ。
伯爵殿は、烈火の如き激怒なり。
我は其時何の武裝もあらざりき、
たとひ若しくは、頭の先きより足の先きまで、剛鐵を
もて甲ひたりとも、
彼等多數に對しては、今はた何をか爲し得べき。
塲所はこれ城の近く、市街を離れて、何の救助も得難
き地、
時は殆ど　曉近き頃なりき。

我は他日の太陽を、又た見得んとは考へず、
我れの生命の瞬間は、僅かになれりと思ひたり。
されば我は、聖母マリアと、
一人二人の聖者とに祈禱をさゝげ、
身を運命に任かしゝ時、
彼等は我を、城門内に運び入りぬ、
テレサの運命、如何になりしか吾れ知らず、
其時以來全く吾等別け離されぬ。
傲慢なるパラチン伯の忿怒の狀は、
推測しても之れを知れ。

其は素よりの道理なり。
されども彼れの最も怒るは、
かゝる意外の事件が、
將來彼れの、家系を褻がすを恐れてなり。
又た彼れや、其血統の中にても、最も高きに關はらず、
其貴き紋章に、かゝる汚辱を被りしには、
驚愕少なからざりき。
こは彼れ、人間中の第一なりと、自ら思ひ——
他人の目にも然るべく——且つ殊に、我れの眼には然る
べしと、自ら思ひし故にこそ。

あゝ我れ僅かに事の始め、小姓の身にて死せざる可からず——

されど恐らく、王は自ら仲裁しけん。——

我れ小姓の青春を以つてして——

伯爵殿の、忿怒は之れを感ずるも、其形容は之れを畫き能はぬなり。

九

『馬連れ來れ』—馬連れ來たさる。

此馬實に駿馬にして、

ウクライナ產の韃靼種。

其思想の迅速なるは、

四足にありとまで見られたり。

此馬甚だ荒く、其荒きこと、野生の鹿の荒きが如く、

馴致されたることもなく、拍車も轡も未だ之れを受けしことなく、

僅かに一日捕へられて、此處に來りしものたるなり。

鼻息強く鬣振り立て、

烈しく荒るゝも其甲斐なく、

怒りと恐れの泡を吹きつゝ——

此くの如きの荒野育は——我れにまで持ち來されぬ。

彼れの卑しき奴僕等は、

革の紐の多くもて、我を馬背に縛り付け、

急撃一鞭、馬をば解きて放ちしかば、

吾等忽ち突進奔逸、遠く彼方に、蓊然に驅け去りつ、

其急激猛烈なる、如何なる激流も比すべきに非ざりき。

十

驅けれり——驅けれり、我が息盡きぬ、

馬は何處に馳せ行くや、我れは知らず。

時はいま、漸く曉なせる頃、

馬は尙ほ泡を吹きつゝ、たゞ一さんに驅けれり——驅けれり。

我れが敵より驅け出し時、

聽きし所の最後の聲は、

嘲り笑ふ野蠻粗暴の叫びにして、

下賤の奴僕の群衆より、
瞬時の後、風に送られ轟み來れり。
我れは怒りて、突然頭ねぢ上げて、
手綱代りに我れの頸を、
鬣に、縛り付けたる綱を緊付け、
殆ど半、我身を持ち上げ
咀の言葉を叫び返へせり。
然りと雖馬の足がきの速なると、又た其雷なす響とに、
彼等恐らく其を聽かず、又た氣を留むるなかりしならん。

彼等の無禮に、報ひんと思ひたる我れ、
如何てか之れを怒らざらん。
此後我れ、見事に之れに復讎し、
城門も、釣り橋も、又た重き釣り格子も、
石も、障害物も、堀も、橋も、又た柵も、
一も之れを殘こすことなく、
其田畑には、草の一と葉もあらしめず、
たゞかの館の、煖爐の石の在りしあたり、
崩れ落ちたる壁の上に、草の生ゆるのみとはなしぬ。
人若し、數々其所を過ぎ行くとも、

嘗ては此處に城塞ありしを、夢にも知ることなかるべし。

我れ、其塔や、樓は燃え、
城砦の壁は裂け碎け、音を立てゝ崩れ落ち、
燒けて黑ずむ其屋根は、
厚さはたとひ厚しとも、復讐除けとなり能はず、
鉛の熱湯、(十三) 雨の如く注がるゝを見き。
曩きに彼等が電なせる馬に我れを乘せ、
死地に激奔爲さしめて、吾れに苦痛を與へし日には、
他日我れが再び來り、

五千騎の二倍もて、
伯爵殿の無體なる、乘馬に謝禮すべしとは、
夢にも之れを思はざりけん。
其時彼等我れに惡戲し。
荒れ馬をもて嚮導となし、
そが汗血の脇腹に我を縛れり。
されども「時」は、凡ての物を平均す——
遂には我れは、思ふがまゝに、彼等を戲れ弄びぬ——
若し吾等、人の罪をば赦るすことなく、
たゞよく時機を窺ふ時は、

かの惡行を蓄へて、積み重ねたる者に對して、
忍耐なせる探索と、長き時日の注意とを、
遁れ得しむる人力なるもの、未だ嘗て之れあるなし。

十一

『驅れり、驅れり、我と馬とは、
風の翼に打乘りて、
人の住居は、凡てこれを後に見ぬ。
馬蹄の音は鳴り響き、
夜は北光に閃く時、
天を横ぎる流星の、如くに吾等飛び行きぬ——
我等の路に當つては、町も村も一つだになく、
曠邈たる大野原が

黑き色なる、森に限られあるのみにて、
遠き彼方の小高き山に
土耳其人種を防がん爲め、去る年築きし城砦の、
やぐらの壁をかすかに見るのみ——
人跡更に有ることなし。
こゝは前きに、土耳其軍勢侵入し、
スパーヒ騎兵の、馬蹄の蹂躙し盡くして、
草の綠は、血潮の泥に塗れし所。
天は曇りて、灰色なして薄暗く、
低く吹き來る軟風は、物哀れげに下匍匐つ、

我れたゞ歎息、之れに答へ得たるのみ。
されど我等は、遠く遠く、急速に馳せ去りつ、
と息も祈禱も、何れもこれを爲し能はず、
冷たき汗は、滴々と雨なして、
毛荒き馬の、鬣の上に落つ。
されども馬は、尙ほも怒りと恐れとに、鼻息荒らく
飛ぶが如くに大速力もて長驅せり。
時には我れ、まことに思ひけらく、
馬は今や、其速力に弱りしならんと。
されど然らず。縛られたるか細き我身は

怒れる馬の力に取つては、何ものにてもあることなく
却つて拍車の用を爲し、
脹れて痛める我れの五體の、其苦しさを弛めんと。
身を動かする度毎に、
馬の怒と駭とを、愈々增すにとゞまれり。
我れ試みに聲立つれば――あゝ微かにして低けれども、
馬は恰も鞭打たれたるものかの如く、うねりつ曲りつ
一言一語に駭きて、
突然ひゞく喇叭の音を、聽きしが如く跳び上り、
忽ちにして、我を縛れる革紐は、血潮に濡ひ、

凡て手足ににじみ流れ、
舌の渴は。
火焰よりも尙ほ一層、猛烈きものとなり來りぬ。

十二

我れ森林に近づきぬ——
際てしもあらぬ廣さにて、
彼處に此處にそば立てる、喬木老樹は
かのシベリアの荒野より、猛り狂うて吹き下だす、
其すさまじき勢に、森を赤裸に剝ぎ去らん
最も荒き疾風にも、敢て屈することはなし。
さはいへ是等は數少く、又た互に隔りて、
其の間には若かき綠の灌木の、茂げみはいとゞ深くし

て、
其年々の、青葉豐かに榮ゆなり。
然りと雖、秋の夕の木枯吹かば
森の木の葉は枯れ落ちて、
色は全くさめはてゝ、生氣あらざる赤となり、
さも戰場の屍の上に、
硬ばり固まる血潮の如く、地一面に散り敷きて、
冬の夜長の白霜の
其等死人の、墓なき頭におくときは、
冷えて凍りて堅まりて、

さすが烏の喙も、凍りし其等死人の頰をば、穿ち得ざるの趣あり。

げにこれ、樹の下生の荒野にて、
彼處に此處に胡桃の木、
不撓不屈の、樫の木松の木そば立てど、
是等は互に隔りて——こはまことに仕合せなりき、
若し夫れ然らざらんには、我運命や如何なりけん——
多くの枝は道を開きて、我の手足を傷つけず、
已に寒氣に、いためられたる我傷も、
これに耐ゆるの、力あるをば知り得しも、

我を縛れる革紐は、身をゆるむるを許るさゞり。
我等宛も風の如く、音騒がしく枝葉の中をくゞり行き。
若木も、老樹も、狼も——是等を後に見殘せり。
夜ざれば、是等多數の狼は、我が行く路に吼え唸り、
群を爲して、吾等の後に迫り來り、
其迅速なる長驅には、
深き恨の獵犬をも、獵師の銃をも疲らし得べく、
吾等何處に驅けるとも、彼等必ず後附け來り、
朝の太陽登るといへども、彼等決して去り行かず、
夜明の頃には、森林中をうねり廻り、

後に迫る、僅かに一丈半の隔。

夜はよもすがら彼等の足音

或は忍び、或は騒ぐ足音の、繰り返へされて聽ゆるなり。

あゝ、我れ死なでかなはぬことなりせば、

寧ろ多數に取り圍まれ、

死地に陷り、多くの敵を斃しつゝ

或は槍に、又た劍に、死なんことをぞ望みたる。

始め我れ、馬の驅け出でたりし時、

我目的は、已にこれを、達し得たりと思ひしも、

今や馬の速力も、力もこれを疑ひぬ。

然りと雖、此疑は用あらず、其速力と荒き育は

彼を勵まし力付け、宛も牡鹿の如く爲し

森林中を馳する勢、

眼くらます吹雪の爲めに

農夫を己が門邊に倒はし、

再び闘ふみこゑて、我家に入るを得しめざる、

目も開かれず降る雪も、其迅速なるには遙かに及ばず—

疲れず、馴れず、暴らきよりも尚ほ惡しく、

其狂暴の有樣や、思ふ所を妨げられし小兒の如く、

尙ほ一層に猛烈なるや――氣隨氣儘に振まへる、
婦女子の怒れる如きなり。

十三

『森も之れを通り拔け、日も已に正午を過ぎ、時、六月の空にしあれど、風は甚だ惡寒し。

こはこれ或は我が脈の、冷たく流るゝ故にやあらんか――いと長びきし耐忍は、猛けき氣象も鈍らせて、其時我は、今見る如きに非りき。

さはさりながら、寒き流れの其如く、いと急遽はしく、我が諸々の感覺は、其原因を考へ得たらん其の前に全く疲れ弱りはて、

狂暴と、恐懼と、又た激怒と、
我れの前途に當れる所の
寒氣と、饑餓と、悲哀と、耻辱と、苦痛の苛責と共に、
此くは自然其儘の、赤裸の身にて縛られぬ。
我れやかの、昂揚なせる其血潮は
若し其靜かなるを激せしめて
强くこれを踏み付くれば、
其復讐や、毒蛇のそれの如きなり、一族より出でし者—
今若し疲れ果てたる此我身が
苦難の下に一時沈むも、何の異しむことかある。

地は陷落し、天は回轉し、
我は地中に、沈沒するかと感じたり。
されどこはこれ誤なりき—我は固く、縛られてある者
なれば。
胸は痛み、腦は病み、
暫時動悸せしかども、やがて直にそもやみて、
天は宛も强大なる、車輪の旋轉する如く、
木々は宛も醉漢の、よろめくものゝ如くに見え、
微かの火花は、我目の上に見えしかど、やがて是れも
見えずなりぬ。

たとひ如何なる人なりとも
我此時に死なんよりも、苦しき死はよもあらじ。
其ものすごき馬の背に、其苦しみの堪え難たみ、
黒きものは、我目の前に行きかひつ、
自ら目さまし起さんと、必死に力めし如きを感じぬ。
然りと雖、我感覺を勵まして、下より上に、登らしむ
るを爲し得ざり。
我身はげにも、海に浮べる板子に乘れる如くにて、
大浪激しく打寄せて、
其をもち上げて覆へし、

我身忽ち、大海原に、投げ出だされん思ひかな。
今此く、動搖なせる我生命は、
腦に發熱しそむる時、
假幻の光の
深更閉しゝ我の眼に、閃くさまに比ふべし。
されど僅かの苦痛にて、熱も直に去り行けど、
これにまさりて最も惡しきは、思想の亂を起こすにあ
り。
我は實に自白せん——再び是れを感ぜんよりも、
寧ろ死ぬるを優れりと。

されど想ふに我れ死して、塵に歸するに至るまでは
尙ほ一層に、感せざるを得ざるべしと。
然りと雖何かあらん——我は以前も又今も
已に十分我額を、死の面前に曝らしたり。

十四

『我は氣付きぬ。我は何處に在りしにや。
冷えて、しびれて、目まひして、
脈、ひと脈共度に、ためらう生命を取り留め、
動悸に動悸——遂に積りて激痛し、
まさに痙攣せんばかり。
我が血は再び、廻り始めしとはいへど、濃き冷やゝか
のものなりき。
耳には不思議の音鳴り聽こえ、

我れの心臓、爲めに再び震ひ始めぬ。
目は見ゆるに至りしも、尙ほ甚だ微かにして、
厚く硝子を、重ねし如き思あり、
其時我は感ずらく、近くに波は打押せて。
星燦爛と、きらめく空も亦ありと——
こはこれ夢にあらずして、
此荒馬は、其荒らきよりも尙ほ荒らき、流を泳ぎ渡れるなり。
かゞやく大河の、迸れる潮流は、
遠く廣く、滔々と渦まき流れ、

我等は今やまだ知らぬ、彼方の聲なき岸邊に向つて、
進みあせれる中途にあり。
波の音は我の空しき夢幻を破りて、
氣を失へる我の五體は、
一時の力に洗禮されたり。
我此馬の廣き胸は
逆か卷く高き波をも恐れず、
其を衝き破りて我等は進み、
遂に辛くも、平かなる岸邊に着きぬ。
然りと雖これやこれ、我に益なき避難の場所——

そは凡て、過ぎ來し方は暗くして、又た其上にものすごく。
行手は同じく又た凡て、夜と恐とのみなればぞ。
或は夜の、又た晝の、其時間のいくそばく、
終知れざる、かゝる苦痛にあるべきかは、
我れはこれを告ぐるを得ず、
たゞ我が知れるは、我がなす呼吸は、これをしも、
人間の呼吸と云ふべきやを。

十五

『毛皮には光澤を帶び、鬣には水滴り、
足はよろめき、脇腹には湯氣立のぼり、
此荒馬の、強き氣象の筋力は、
追ひも反へさんばかりなる、嶮はしき堤を、尙ほ攀ぢ
登れり。
我等頂上に達して見れば、
はてしも有らぬ平原は、夜の蔭なる暗さと共に延まり
つ、

尙ほ〳〵進み行く程に
夢に見るなる斷崖の
我眼界を打超えて、遠く廣きが如くにて、
月、我が右方に登りなば
かしこにこゝに白き斑
又た飛び散れる、薄暗き綠の點は、
數集まりて、月の光に交はれり。
されども闇き此荒野に
小屋の戸口の徵とて
人家あるをば示めさんは、一物だにも有ることなく、

我を迎ふる星の如くに、
遙にきらめく、小き燈の火も見ゑず、
我の不幸を慰さまん
鬼火だにも出づるなし—
其欺惑も其時は、我の心をよろこばせ、
其を欺惑と知れりとも、我れ尙ほ之れを歡迎せん。
多くの不幸の事の內
人の住家を、我れに思ひ出しむればなり。

十六

『吾等は尙ほも前進せり——されども緩く徐に。
今や野蠻の精力は、全く使ひ盡くされて、
頸垂れ弱る我馬は、其氣は微に力なく、
喘息ぎよろめき歩みけり。
いかにか弱き幼兒たりとも
今此時の此馬は、これを牽き行き得べきなり。
されども凡て我に用なく——
此くは新に馴れしとも、何等の益もあることなし——

我の手足は、縛しめられてあるなれば。
又た假令、其いましめは解かるとも
我の力は、今はた何をか爲し得べき。
さはさりながら我は尙ほ、いと微かなる力もて、
强く縛れる革紐を、引きちぎらんと試みぬ。
然りと雖其甲斐なく、
我の手足は、尙ほ々々痛みを增すのみに、
益なきもがきは、直に之れを斷念せり。
されどこはこれ、たゞ其痛みを、永引かしむるのみに
こそ。

眩暈ふばがりの其驅は、今や殆ど終りし如きも、
終極點には達しも爲さず。
時に棚引く條なす色は、今や將に日の登らんとするを
示めせり——
あゝ其登るや遲きかな。
我は思ひぬ、灰色なせる此朝霧は、
晝の光を、點ずることはあらざるべしと。
しのゝめ明くるかの「火焰」が、眞紅の色に高まりて、
凡の星の位を廢黜け
彼等の乘れる車より、其光輝を召し出し、

奥いと深き玉座より、たゞひとりの、全く己がものな
る榮光もて
此地球を充たすの前、
あゝ朝霧、其の捲き去るの遲かりしかな。

十七

『朝日は登りぬ。
たてこめたりし霧はしも、寂(さみし)き四周の世界より、
後(うし)ろも前も捲き去れり。
何ものか此の、平野を、森を、又河を、
其を横ぎると、踏みさぐみたる者やある。
人も獸(けもの)も——蹄(ひづめ)の痕も足跡も
荒れ茂りたる此土地に、たゞの一つも有ることなく、
旅人行きししるしなく、人働きしあともなく、

四邊(あたり)の空氣凡て寂寥。
小さ虫の一つだに、小さ笛の音(ね)鳴らしもなさず、
朝囀(あさ〜づ)る鳥の聲、
叢(くさむら)よりも森よりも、聽ゆるものは有らざりき。
不幸の事は數あまた、胸は宛も、破れんばかり動悸せど、
疲れはてたる我馬は、よろめきながら尙ほ歩み、
我等は尙ほも獨りさみしく、又たは然るが如く思ひにき。
此くて、よろめきながら行き居りしに、

遂に彼方の、樅の木小暗き樹立より
馬の嘶、聽こゑし如く思ひたり。
其等の樹の枝動くは如何に、そは風なるか。
否々、森の中より、馬の一隊、踏みしだぎつゝ躍り出
で。
此方に來るを我れ見たり。
彼等は大に、隊を爲しつゝ進むなり。
我れ叫ばんとあせりしも、我唇は聲を出ださず。
其等の馬は、滿々たる豪氣を以つて、突進奔放なした
りぬ。

然りと雖、彼等を導く、手綱なるもの何處にかある。
無數の群馬、あゝ何者の乘れるあるなく、
尾は振り動き、鬣ゆらめき、
廣き鼻は、苦痛を以つ開きしことなく、
手綱、轡に、口、血を流さず、
未だ嘗て、足、蹄鐵を受けしことなく、
其脇腹は、拍車に、鞭に、創つけられしことあらず。
無數の馬は、自然のまゝに自由にて、
海上續づく波に似て、
我等の弱き近づきを、迎ふるものゝ其如く、

雷なすひゞき踏みとゞろかし、群れ團りて近寄りぬ。
此光景に、我馬再び興奮し、
よろめきながら、僅かに馳せしも瞬く間、
弱きかすかの嘶を
答となして斃れたり。
息せき喘ぎ、目はうるみ、
汗の氣のぼる其躰軀は、終に動かず横たはり、
我乘る駿馬の、始たり又は終たる大驅は、此くて完く
遂げられぬ。
群がる馬は近づき來り——斃れし馬を打眺め、

又た其が背に、革の紐の多くもて、
縛られてある我を見て、不思議の思ある如し。
彼等は、立ち止まりつ、又た去りつ、我等をめぐりめ
ぐりしか、
彼等の種族の宗領なるらん
する墨黑く、粗らき毛に
白き一點一毛だになき
いと逞しき、一つの馬の先立に
彼等は不意に跳ね躍り、かなたに驅けりとび行きつ、
鼻息荒く、泡をかみつ嘶きつ、右に左に寄せつ返しつ、

其を人間の眼より見ば、皆天性に由れる如く、
森の茂みに馳せ歸へり、
我は依然、死して硬ばる獸に縛られ、
一人あとに殘されて、只失望の外ぞなき。
此くて我身の下には、生命絶えにし躰軀は斃れ、
慣れぬ重みは救はれしも、
我は其處より、彼れも我をも解き去り能はず、
死したるものゝ其上に、今やまさに死なんとして、
我等はこゝに横はり、
我れの家なき助なき、頭を次に明くる日の、

又た見るべしとは、聊か思ひなさゞりき。
『朝より夕に至るまで、我はこゝに縛られて、
重き苦しき、時間を過ごし、
我の最後の日の光、我を照らして西に沈むを
僅に見得る、生命保てるのみにして、
我れの心は、絶望の確かさもて、
前見し得る我等の年齢が、預め示めす所の
最も惡しき、多くの恐れの最後のものに
遂に我等は、委せ了りし思ひせり——

こは實に免れ難き——
其疾く來るや、却つて不親切に非ざる所の、おくり物
にてあるものを、
こはこれ一種の係蹄にして
智慮もて免れ得るかの如く、
尙ほ其を厭ひ其を恐れぬ。
時には是れを願ふと共に、切にこれを求むるあり、
時には劍のきつ尖もて、自ら求むることもあり。
さはさりながら、假令いかに堪え難き、苦痛の生命な
りとはいへ、

尙ほこれ暗き、ものすごき終にて、
如何なる形を以つて來るも、歡び迎ふるものに非ず。
言ふも不思議、かの快樂の子
美と祝杯と、酒と貨に
興樂盡くしゝ其者等は
かの、貧困を、相繼したる者よりも
往々靜かに、死するものなり。
こはこれ凡て美なるもの、新奇のものを
順次に浪費し盡くしゝ者は、
望まん物も更になく、殘せる物も更になく

たゞ未來のみ（これとても
人を、卑しき、或は善きと觀ることなく、
彼等の氣力は、授かり得べきことゝ觀て）
悲しきことも、或はあることなかるべし。
然りと雖憫れむべきかな、彼れ尙ほ、其禍の終らんこ
とを希望して、
其友として見るべき「死」は、
惱み亂るゝ彼れの目には、
己が得べき報酬の、新樂園の樹の實をば
奪はんとして、來るが如く觀ゆるなり。

然りと雖明日は、凡を彼に與ふべく、
彼れの苦痛を返濟し、彼れの不幸を償はん。
明日は、歎くことなく呪ふことなく、
光りかゞやき且つ長く、手招き寄する年月の
其初めの日なるべく、
苦しかりにし、長き時間の報酬として、
明日こそは、支配し、かゞやき、擊ち、救はんの力を
彼に與ふべく——
其が墓の上に、東雲あくべきことなるか

十八

『日は將に沒せんとせど、
我れ尙ほ寒き、硬固なる馬に縛られ、
我等の土は、こゝに交ゆることゝ考へ、
くらきおぼろの我の目は、死をば今や需むるなり。
解き放されて、自由を得べき望は起らず、
目を上げて、最後の眺めを、空に向けしに、
日と我との間には
待ち設けたる烏は飛び、

夕の光

我等の死するを待ち兼ねて、
其食事を始めんとせり。
彼れ飛び去りつ又た棲まりつ、又た再び飛び去りつ、
其時毎に前よりも、愈々我に近づきぬ。
我れ、曉の光の中、其羽ばたく翼を見、
一度のごときは、打ち得るまでに近づきしも、
あゝ我れ力あらざりき。
されど僅かに我手を動かし、
いとも弱く砂を搔き、
咽喉勵まし、微かにして、僅かに聲と稱へ得る、

苦しき音を立てしかば、
漸く是等を以つてして、烏は威どしさりしかど、
其れより後は何をも知らず——
我の最後に見し夢は、
いと美はしき星は、鈍りし我の目にかゞやき、
其光はさまよひて、かなたこなたに、ゆきゝしゝつ、
寒き、鈍き、漂へる
さりては來る感覺あり、
次には再び死に沈み、
次には再びかすかに呼吸し、

暫く震ひ、暫くやみ、
氷の如き病ましさは、我れの胸に蔽ひ凝まり、
火花の星は、我腦中を横切りつ——
息さ逼り、胸は動悸し、苦痛にもがき、
といきつき、其他は何も知らざりき。

十九

『我は目さめぬ——我は何處に在りにけん。
我の上に見下すは、こは人間の顔なるか。
我の上を蔽へるは、こは屋根にてあるなるか。
我の此身の休めるは、こは寢臺の上なるか。
我の臥せるは、こは室にてあるなるか。
かしこに柔しき眺めもて、我を見まもれる
すゞしき其目は、こは人間にてあるなるか。
我は再び目を鎖ぢたり、

そは前きの、我が見し夢か幻かは
未だ終らぬ思ひして、尙ほ疑のあればなり。
か弱き乙女、髮長く、丈高きが、
小屋の壁にもたれつゝ、我を見まもれり。
乙女の眼のかゞやきを、我れはみとめつ、
これと共に、我は始めて氣付きたり。
自然のまゝに飾なき、黑目勝なる目なざしもて、
乙女は時々、つく〳〵と、憐れむさまに我を見ぬ。
我も見つめぬ。
こは幻に非ずして、

我は生きて
鷲の餌じきとなることを、免れたるを知るまては、
我も同じく見つめたり。
我の重き目、遂に漸く開きしを、
見て、コザックの乙女は微笑み、
我れ語らんと力めしも、未だ言葉は出でざりき。
乙女は我に近寄りて、
其唇と指とをもて、符諜となして我を制し、
我の力の回復して、
思ふがまゝに、語り得ん時までは、

強て無言を、破る勿れと誨へつゝ、
其手を我手の上に置き、
枕を直ほし平にし、
爪先もて忍び足して、
静かに戸をあけ、いと小聲にてさゝやきぬ——
此く美しき聲音をば、未だ嘗て聽きしことなく
其いと輕き歩みには、音樂附き添ふ思ひせり。
然りと雖乙女の呼びし、其等の者は目さめずて、
乙女は彼方に出で行きぬ。
其出で行く時にしも、再び我をかへり見て、

又た他の手眞似の符諜もて
我れ何物も、恐るゝことの用あらず、
凡の人は近くにあり、一度命じ、呼びもせば、
彼女、直にこゝに歸り來る、事の由をば知らせたり。
此くて乙女は行きければ、
我はあまりに一人にて、物さみしさを感じたり。

二十

乙女は來れり、母と父とを伴ひて——
その以上、語るの用はあらざるべし——
長く其餘を語りつゞけて、人倦ましむるは本意ならず、
其時この方、我れはコザックの客となれり。
彼等は荒野に、氣を失へる我を見出だし、
あたりの小屋に我を連れ込み、
再び我を生命にかへしぬ——
其我や——他日彼等の國土をば、支配する爲めたりしな

り。

(十五)此くて愚のしれものども、たゞ其怒を饜かさんと、
我が苦痛にて精練し、
我を縛り、裸にし、血を流し、又た唯一人、我を荒野
に逐ひやりて、
荒野を變じて、王座と爲さしめたりしなり——
人誰か、己に定まる運命を、想像爲し得る者やある。
さらば人々、決して落膽することなく、決して失望す
ること勿れ。
明日、土耳其の堤(十六)の上にて、

我等の馬は心安く、秣食み得る其さまを、
ボリステネースの河や見ん。
我等安けく、其處に到着する時は、
未だ嘗て、此くまで厚き歡を、河なるものに、述ぶる
ことはあらざらん。
さらば、人々寢よかし。』
〔語り終りて〕酋長は、其身を伸ばして、樫の樹蔭に横
へぬ。
木の葉の床は、前に已に作りあり、
かゝる寢床も彼に取つては、敢て不愉快なるにもあら

ず、又た新奇なるにもあらずして、
何處なりとも其は問はず
時來りなば何時にても、彼は其場に打臥して、
其眼は直に、瞼はしき眠を急ぐなり。
若し人、カロルス王が、彼れの爲したる物語を、
謝することを忘れしを、異しむことあらんとも、
彼れは敢て異しまず——そは一と時其前に、王は已に、
眠り居りしを以つてなり。

《をはり》

註釋

（一）ポルタワ戰爭——瑞典王カロルス十二世魯西亞を征して全敗を取りし戰爭にて、此戰爭にて、瑞典全く勢力を失ひ、魯西亞は愈々勃興せるなり、時は紀元一千七百九年。

（二）「ツァール」—魯西亞帝ペートル大帝なり。

（三）他年一層今にもまさり——ナポレオンが魯西亞を征せし時のこと

（四）ギエター—カロルス王部下の大佐なり。

（五）ブケファロス——古昔グレシアの大王アレキサンドロスの愛馬にして、此馬に乘り得るは、たゞアレキサンドロス一人ありしのみ。戰地に常に伴ひ、ペルシアと印度の境、ヒダスペス河邊にて死し、こゝに葬る。『汝がブケファロス……』とは、マゼッパと其馬との關係に就いて云ふなり。マゼッパは大馬術家なればなり。

（六）スキチア人——此國は歐洲東北、亞細亞西北一帶の古代の地なり。國人皆乘馬に有名なり。

（七）ボリステネース——ドニエペル河（ニーペル河）の舊名。土耳其にてはウジ河と云ふ。

（八）チルジス——詩人テオクリツス及びヰルギリウスの詩中の牧羊者の名なり。田舍者の名を示めすなり。

（九）「バラチン」——宮廷内の高位の官吏なり。

（十）鹽礦銀山——此處に此くの如き句を出し來るは、波蘭の此地方は是等のものゝ產地にして、其所有者は富者を示めす、

（十一）其眼は實に亞細亞的——バイロン殊に亞細亞婦人の黑眼勝を好む。

（十二）かゝる優しき情の事——カロルス王は一生婦女子を近づけず、情を解せざりし人なり。

（十三）鉛の熱湯云々——古代城攻め法の一種にして、屋根の上より鉛の熱湯を注ぐなり。

（十四）スパーヒ騎兵——十四世紀土耳其にて組織されし騎兵隊にして其戰鬪の方法や全く秩序なきものなり。「ニニチェリー」軍と共に土耳其の軍隊の花なりき。

（十五）此くて愚のしれものども——前の「パラテン」の伯爵等を謂ふ。

（十六）土耳其の堤の上——之れポリステネース河の堤にして、當時此河露西亞と土耳其との境界なりき。

明治四十年二月二十六日印刷
明治四十年三月　六　日發行

マゼッパ奥附
正價五十錢

著譯者　東京府下淀橋町柏木三〇九番地　木村鷹太郎
發行者　東京府下淀橋町柏木三〇九番地　木村鷹太郎
印刷者　東京市神田區松下町十番地　横田五十吉
印刷所　東京市神田區松下町十番地　横田活版所

發行所　東京府下淀橋町柏木三〇九番地　眞善美協會
發賣元　東京市神田區上白壁町九番地　二松堂書房
振替貯金口座番號第三八一四番

木村鷹太郎氏重要著譯目錄

○プラトーン全集（第一第二既刊）眞善美協會（三、四、五、續出）富山房　定價一卷三圓五拾錢　二卷三圓八拾錢

○東洋倫理學史（上卷既刊　下卷編纂中）博文館　全一册貳圓八拾錢

○東洋西洋倫理學史（博文館）全　五拾錢

○大日本建國史（尙友館）全　壹圓五拾錢

○海賊（同）全　六拾五錢

○鳴潮餘沫（同）全　六拾錢

○萬國史（同）全　貳圓

○西洋小史（同）全　八拾錢

○パリシーナ（バイロン原作）（同）全　貳拾錢

○日本主義國教論（開發社）全　四拾五錢

○バイロン文界の大魔王（大學館）全　四拾錢

○ソークラテース人物養成譚（同）全　四拾錢

○孔子、孟子、荀子人物養成譚（同）全　三拾錢

○老子、列子、莊子人物養成譚（同）全　三拾錢

○王陽明人物養成譚（同）全　三拾錢

○眞善美（第一卷、美の卷　文祿堂）全　壹圓

○眞善美（第二卷、眞の卷　近刊）全　壹圓

○眞善美（第三卷、善の卷　近刊）全　壹圓

○宇宙人生の神秘劇天魔の怨（岡崎屋）全　七拾錢

○汗血千里マゼッパ（眞善美協會）全　五十錢

木村鷹太郎先生譯

プラトーン全集第二

理想國

定價 貳圓八拾錢
小包料内國貳拾錢
製本 堅固美麗
背一面の金模様

本篇は不朽の名篇『理想國』及び續篇『チマイオス』續々篇『クリチアス』等を收め、燦たる天体より、哲學、教育、政治、文學、美術、音樂、兵事、醫術、法律等に至るまで天上天下**宇宙大の知識**を打し一九となし、**眞善美**合一の大理想を以て、星斗**美の宏大**なる其思想の**剛健**なる日智識の**該博**なる凡の學者凡の社會高尚健全なる、而するもの。其理想の國家を出現せしめんと**尚武尚青年男女の**も趣味ある無二の凡の年齢—特に現今好讀物として推薦す。**女子兵役論**等の婚姻問題もプラトーン是を論ずることを女權論、女子共有說、忘れざりき。歐米古今精神界、文學界政治界の偉人にして本書の**感化**を受けざる者なし。『理想國』を讀まざ者は與に語るに足らず

發行所 東京府下淀橋町柏木三〇九番地 **眞善美協會**

木村鷹太郎先生著

眞善美

美の卷

表裝羊皮背金文字入
高 雅 堅 牢
定價 金壹圓
郵稅 金十錢

『眞善美』は木村先生の哲學、文學、美術、政治、教育、宗教、社會、國家等各方面の問題に關する論文美文集なり。其破邪としては雷霆の如く火山の如く、其靜思としては海面波なきの夜星辰燦として之に映ずるの觀あり。其該博なる學識や東西古今雅俗に通じ其思想や健全明晰其文章や春風の駘蕩たるあり秋骨の稜々たるあり。實に學識を以つてするも感情を以つてするも文章を以つてするも世間の所謂論集文集等の類を拔て巍々然たるものなり。『眞の卷』『善の卷』は續出す。

發賣所 東京日本橋區樽正町一番地 **文祿堂**

バイロン作『カイン』●木村鷹太郎君譯

宇宙人生の神秘劇

天魔の怨

一條畫伯畫表裝
極彩色優麗無類
正價七十錢
郵税六錢

ゲーテ評して空前の大作と言しは此書にして剛愎なる懷疑深玄なる哲理を以て宇宙人生を大觀す、星斗燦たる天界陰欝なる死界の逍遙あり、樂園あり荒野あり、曉星あり夕照あり、惡魔あり美人あり、宇宙の眞相人生の意義、生死の覺悟色欲と生欲、人類の將來等の問題は美麗なる戲詩として現る素より人類に對する同情の涙ありと雖又た反抗的奮鬪的態度を以て人生に處せんとする氣慨の凛然たるものありて全體の構想言語や實に莊嚴雄大優美を極む宇宙人生の問題本書に依て繹然たるものあるべし

發行所

神田區上白壁町九番地　振替貯金口坐番號四〇九　二松堂書房

神田區雉子町　振替貯金口座番號三八一四　岡崎屋書店

バイロン原作
木村鷹太郎君譯

（訂正第六版）

海賊

クロース表裝優美挿畫
表紙意匠等和田英作氏
バイロンの肖像挿入
正價金六十五錢
郵税金八錢

之高尚な思想を有社會人類に盡さんとしたるれる所ありて身を海賊となし以て『我船』『我劍』學而も彼れや世界萬人に復讐せんとするなり一哲學者が社會の忘恩嫉妬に憤の朴の『思想の力』を以て衆を服し以て海上に號令す。木編には金波燦海にたる地中海岸丘上の素生活樓閣の琵琶の和樂あり阿鼻哄喊劍戟の音天を焦がす炎々たる火炎あり、愛あり敵あり、さゝ、谿流あり狂瀾怒濤あり、鐵石冷たる哲學者海王に對しては夜叉の如き天女の加き艶麗なる美人の熱烈なる戀愛あり。美にし力に富めしては的大文學。宜なり原詩は發行即日譯者は『日本のバイロン』たる木村君。譯文は口に吟誦すべき、一萬四千部を賣り盡したるや。一種の文體。

發行所　東京神田美土代町二ノ一　尚友館書店

理學士 菅野皆可先生校閲
高村休松編

三月中發行

受驗者必携

最近幾何學要義

全一冊 美本
定價金五拾五錢
郵税金六錢

現今世に行はるゝ幾何學問題解義多くは初等幾何學の範圍に止まり其以上のものに至りては特に杜撰の譏を免れず先生爰に慨する所あり「リチードソレ」「ラムゼー」「ペテルセン」「コンブルス」諸大家の書につぎ近世幾何學を主とし傍ら平面、立體に關する緊切重要なる問題を撰集し之に解義を附し一は幾何學解法の指針を示し一は難問題に解決を與へらる若し夫れ論理の正確と用語の簡明とに至りては世間此書の右に出づるものあるを見ず本書の如きは世の幾何學を學ぶもの特に高等學校幷に中等教員の檢定に應ぜんとするの士は必ず座右に備ふべき寶典なり

發行所 東京市神田區上白壁町九番地 振替貯金口座第三四〇九 一二松堂書房

理學士 大森千藏先生著

訂正第五版

普通生理衛生學

洋裝美本全壹冊
正價金貳圓
小包料金拾錢

生理衛生の學は普通何人にも其一斑を如何せしめざるべからず又現今普通學科にとりては尤も重きを茲に置かざるべからず然るに世人稍もすれば此學を等閑に附するのみならず普通教育の上にとりても他の學科に比して甚だ重きを置かざるの憾あり是蓋し目から之を學び或は他に之を授くるに世上未だ適當なる良書なきに由らずんばあらず從來此種學問は特に醫家の專考に委ねしより偶々著名の作あるも卷帙浩瀚所説深遠にして到底專門の士に非ずんば其を解する能はず著者茲に慨するところあり多年泰西諸大家の書に渉獵し其粹を拔き其要を摘み以て本書を編纂とり期するところは世人をして普ねく此學の眞趣を解せしめ又一般此學の教授に從事せる人をして其參考の資に供せしむるに在りとす。以上の趣旨に基つき本書は先づ人體構造の大意より其各部の解剖組織の概要を示し次て其生理上の學説より次第に衛生上の法則に論及し兼ねて亦實驗法救急法等をも略示せり今其所説の周到にして興味ある其意義の精確にして鮮明なる恐くは本書の右に出づるものなけんも其挿圖の精緻にして流暢なる

發行元 東京市神田區上白壁町九番地 振替貯金口座第三四〇九 一二松堂書房

樞密院副議長　東久世通禧伯外二大家題侍歌
東京帝國大學理科大學教授三好　學氏題文
東京朝日新聞學術部産業部主事記者海南小西和氏著

訂正

日本の高山植物

正價金四拾錢
郵税金四錢

◎大阪朝日新聞批評

本書は嘗て著者が東京朝日新聞の爲に稿を起せし日本に於ける高山植物に就ての意見を一卷に蒐め、更に增補と訂正を加へ以て袖珍用小冊に表裝したるものなり。其記述の方法は敢て學理の深邃に走らず又科學上の未難なる熟語を振り舞はさず、勉めて平易と簡明とを貴び、有趣味の解釋を下して高山攀登者と高山植物採集者と其培養者とに便宜を與へんとするに在るものゝ如し。編述のため參考とせし圖書豊富にして、製本亦中々ハイカラに出來上れり。兎に角本書は著者が實地に照して研究したる結果に成りしものにして、挿入の圖畫等一々親切に描かれたり。從つて植物學の趣味を有する人々には良好の參考書たるべきなり。

發行所　東京市神田區上白壁町九番地
振替貯金口座第三四〇九番　一松堂書房

正誤

頁	行	誤	正
緒言 七	九	尊敬を稱し	尊敬を博し
同 一四	八	Ga'utz	Galatz
三七	六	生命を	生命をば
四八	八	雷（いなづま）	電（いなづま）
四九	二	不體なる	無禮なる
六四	八	それの如きなり	それの如きなる
七六	二	野蠻 精力	野蠻の精力
九三	五	曉（あかつき）の光	夕（ゆふべ）の光